名古屋女子大学　紀要　41（人・社）　247～258　1995

シェイクスピアの四大悲劇における罪意識

齋藤　透*

The Sense of Sin in the Four Great Tragedies of Shakespeare

Toru SAITO

I

シェイクスピアの四大悲劇には「罪」を表す語句がかなり見られる。例えば *Hamlet* には罪を表現するのに crime, fault, guilt, offence, sin, trespass といったさまざまな語が用いられている[1)]。そして殊に第3幕第3場には「罪」が Claudius 王の罪の自責の形で集中的に用いられている。他の三悲劇においてもほとんど同程度の「罪」の記述があるが、その種類はそれぞれ異なる。

まず *Hamlet* においては兄殺しという罪、*Othello* では妻殺しの罪、*King Lear* では子の父に対する離反の罪、*Macbeth* では王及び臣下殺しの罪ということになろう。従ってこの四大悲劇での「罪」とは親族または王や臣下の殺害の罪が主たるものであり、親族への離反、そして相互の殺し合いに至る *King Lear* のテーマがそれに続くものである。この「罪」を表す種々の英語についてはすでに *Hamlet* に言及したとき6語を挙げたわけであるが、他に *Othello* に ill, vice, villany, wrong、*King Lear* に mischief、*Macbeth* に demerit, treason など通常は「罪」とは訳されない語が用いられている場合もある。更に、〔1〕murder, parricide；〔2〕a thing so monstrous, foulness のように、〔1〕その語の前に(a sin of)を補うか、〔2〕または文脈から「罪」と訳すのが適当である語句もある。この後者、つまり通常はそう訳さないのに、訳者によって「罪」の訳語があてられている場合の語(句)は多岐にわたり、動詞形で表されているもの、全く「罪」に該当する語はないが、context から「罪」の訳語で表しうる場合などもかなり多数におよぶ。訳者によってこの「罪」という訳語の使用法、使用数は異なっている。例えば福田恒存訳と小田島雄志訳を比較した場合、*Hamlet*の第3幕第3場だけで言えば、前者には12、後者には14の「罪」と言う文字が用いられている。また、*Othello* の第5幕第2場では、福田訳で10字、小田島訳では8字であり、用いられている箇所もかなりくいちがいがある。福田訳の第5幕第2場冒頭の Othello の独白では始めの2行(新潮文庫 P. 159)に3度用いられ、小田島訳(白水 u ブックス p. 207)では独白の始めに「罪」の文字は一度も用いられていない。これはかなり極端な例だが、いかに各氏の訳業が、同一の原文を元にしながら異なるものかの証左となる例かと思われる。

それでは原文の中で「罪」を表現する、またはする可能性のある英語として何が最も多く用

*名古屋女子大学非常勤講師

いられているかを、Bartlett の Concordance[2]によって調べてみると、四大悲劇に限って言えば、offence が最も多くて26回、fault が22回、次が sin で15回であり、「罪」と訳されている場合も往々あるという語では murder が圧倒的に多く45回、treason が18回、vice が15回となる。上述の offence, fault の両語も常に「罪」の意味で用いられているとは限らない。「罪」を表す基本的な語 crime は8回と意外に少なく、また guilt, trespass は6回と5回である。

ここでこの小論の主題にある「罪意識(the sense of sin)」に思いをいたすと、sin で表される罪概念は自分の良心に訴えてくる罪業の気持ちであり、offence や fault ではその意識が薄れるのではあるまいか。OED[3]によると、SIN は第1義として an act which is regarded as a transgression of the devine law and an offence against God ; a violation (esp. wilful or deliberate) of some religious or moral principle とある。そして OFFENCE には「罪」に近似した意味として第5義の the act or fact of offending, wounding the feelings of, or displeasing another; usually viewed as it affects the person offended; また第7義として a breach of law, duty, propriety, or etiquette; a transgression, sin, wrong, misdemeanor, or misdeed, a fault とある。そこには sin も同義語として挙げられている。次に FAULT になると、第5義として something wrongly done **a.** In moral sense: a dereliction of duty; a misdeed, transgression, offence また第7義に **a.** With reference to persons; culpability; the blame or responsibility of causing or permitting some untoward occurence; the wrong doing or negligence to which a specified evil is to blame. とある。以上の3語の用例として Shakespeare の四大悲劇から挙げられているのは、OFFENCE 第5義の用例として**1604** Shaks. *Oth(ello)* Ⅱ. iii, 52 As full of Quarrell, and *offence* As my yong Mistris dogge. (=as full of quarrel and *offence* / As my young mistress'dog: 〔たちまち若い女のかわいがる犬っころのように／いきりたって吠え出すだろう。——小田島訳〕)があるのみだが、この用例では「罪」の意味に近似しているとはいいがたい。

そこで四大悲劇中の SIN, OFFENCE, FAULT の用例について考えてみる。まず SIN についての例をしるす。

①*Hamlet*

1. Thus was I, sleeping, by a brother's hand/Of life, of crown, of queen at once dispatch'd, / Cut off even in the blossoms of my **sin**, /Unhousel'd, disappointed, unanel'd, /No reck'nning made, but sent to my account/With all my imperfections on my head. (1.5.74～79)[4]

「こうして、仮寝のひまに、実の弟の手にかかり、命ばかりか、王位も妃も、ともども奪い去られ、聖礼もすませず、臨終の油も塗られず、懺悔のいとまもなく、生きてある**罪**のさなかに身も心も穢れたまま、裁きの庭に追いやられたのだ。」(咲き誇る**罪**)[5]

2. Soft you now, /The fair Ophelia ! Nymph, in thy orisons/Be all my **sins** remember'd. (3.1.87～89)

「しっ、気をつけろよ。美しきオフィーリア・・・おお、森の女神どの、その祈りのなかに、この身の**罪**のゆるしも。」

3. To my sick soul, as sin's true nature is, / Each toy seems prologue to some great amiss. (4.5.16～17)

「この病める胸には、**罪**あるもののつね、ささいなことも、なにか大きな禍（まが）ごとの先ぶれでもあろうかと。」(**罪**を犯したものの知るさだめか)

②*Othello*

1．God forgive us our **sins**！(2．3．105)

「神よ、われらの**罪**を許したまえ！」(どうかお許しを！)[6]

2．were't to renounce his baptism, /All seals and symbols of redeemed **sin**, /His soul is so infetter'd to her love, (2．3．334～336)

「たとえ洗礼を取消し、**罪**の贖いなどという信仰を一切合財捨ててしまえと言われようと、すっかりあの女の虜になっている奴のことだ、」(**罪**の贖いのしるしを)

3．Therefore confess thee freely of thy **sin,** /For to deny each article with oath/Cannot remove, nor choke the strong conceit, /That I do groan withal:(5．2．54～57)

「それゆえ、自分の犯した**罪**を洗い浚い話してしまったほうがいい、誓いなどを立てて一々打消してみたところでどうにもならぬ。そのようなことで、今おれが呻き苦しんでいるこの激しい夢魔を、取除くことも絞め殺すことも出来はせぬ。」(正直に犯した**罪**を告白するがいい)

③*King Lear*

1．I am a man/More **sinn'd** against than **sinning**. (3．2．58～59)

「この身は**罪**を犯されこそすれ、犯した覚えの無い者だ。」(**罪**を犯すよりも犯された人間だ)

2．Plate **sin** with gold, /And the strong lance of justice hurtless breaks; (4．6．163～164)

「**罪**には金の鎧を着せるに限る、如何に鋭い法の槍先も折れ砕けて中まで通らぬ、」

④*Macbeth*

1．The **sin** of my ingratitude even now/Was heavy on me. (1．4．15～16)

「御身にたいする忘恩の**罪**、今も気にしていたところだ。」

2．smacking of every **sin**/That has a name;(4．3．59～60)

「名のつくかぎりの**罪**を一身に背負っている、」(およそ名前のあるあらゆる**罪悪**)

以上のSINの用法から考えてもわかるように、SINと言う語の持つ意味合いには宗教的な要素が多分にある。しかし始めにふれた*Hamlet*の第3幕第3場のように兄殺しを行った王Claudiusが自らの罪を悔いて祈ろうとする極めて宗教的要因の強い場面であるが、そこではsinは1語も用いられず、代ってcrime, fault, guilt, offenceなどが用いられている。そこで次にOFFENCEの用例をあげてみる。

①*Hamlet*

1．O, my **offence** is rank, it smells to heaven;/It hath the primal eldest curse upon't-/A brother's murder. (3．3．36～38)

「おお、この**罪**の悪臭、天へも臭おうぞ。人類最初の罪、兄殺しの大罪！(兄弟殺し)[7]

2．Whereto serves mercy/But to confront the visage of **offence**? (3．3．46～47)

「**罪**びとのうえに注がれてこそ、慈雨ではないか？」(**罪**人の面に)

3．May one be pardon'd and retain th' **offence**? (3．3．55～56)

「**罪**の獲物を手放さずにいて、それで許されようなどと、そのようなことが？」(人殺しの**罪**を犯した結果手にいれたものを)

②*Othello*

1．I had rather ha'this tongue cut from my mouth, / Than it should do **offence** to Michael Cassio: (2．3．213～214)

「むしろ舌を切りとられたほうがましだ。マイケル・キャシオーを**罪**におとすようなことを言うくらいなら。」

2．If my **offence** be of such mortal kind, /That neither service past, nor present sorrows, / Nor purpos'd merit in futurity, /Can ransom me into his love again, /But to know so must be my benefit; (3．4．112～116)

「私の**過**(あやま)**ち**はもはや取返しつかぬ、過去の勤めぶりも現在の悲しみも、また将来かならずお目にかけましょういさおしも、ついに二度と将軍のお心を得られぬものとおっしゃるなら、ただそのことを承るだけでもさいわいと存じます。」(私の**罪**が)

③*King Lear*

1．Sure her **offence**/Must be of such unnatural degree/That monsters it, (1.1.217～219)

「定めし、その**罪**たるや鬼畜も恐れる大それたものに相違無く、」

2．And the noble and true-hearted Kent banish'd！ his **offence**, honesty！ 'Tis strange.(1．2．113～114)

「そう、あの義に厚い高潔の士ケントが追放されたのだ、その**罪**は正直にあるという！おかしな話があったものだ。」

3．All's not **offence** that indiscretion finds/And dotage terms so.(2．4．193～194)

「**罪**と申しても、分別を失った者の目にそう見え、老いぼれた者がそう呼んだからとて、必ずしもそうとは限りませぬ。」

④*Macbeth*

この劇にはoffenceという名詞は一つも用いられておらずoffend, offendedの形がそれぞれ一つづつあるが、何れも「罪を犯す」意味で用いられてはいない。

最後にFAULTについての用例を求める。

①*Hamlet*

1．Fie, 'tis a **fault** to heaven, /A **fault** against the dead, a **fault** to nature, /To reason most absurd, (1．2．101～103)

「愚かしいぞ。天に背き、死者に背き、自然に背く。いや、なにより理性そのものに背く**罪**というもの。」

2．My **fault** is past——but O, what form of prayer/Can serve my turn? (3．3．51～52)

「犯した**罪**はもう過去のものではないか。ああ、だが、どう祈ったらいいのだ、おれは？」

3．there the action lies/In his true nature, and we ourselves compell'd/Even to the teeth and forehead of our **faults**/To give in evidence. (3．3．61～64)

「いかなる行いも、あるがままに裁かれ、否も応もない、一々証拠をもとに、泥を吐かされてしまおう。」(犯した行為は／あるがままの姿であらわれ、われわれは／いやおうなくその**罪**の面前に引き出され、／証言を迫られる。)

②*Othello*

1．Or did the letters work upon his blood, /And new create this **fault**? (4．1．271～272)「それとも、手紙が気に障りでもして、心にもない**過ち**を犯してしまったとでも？」(はじめて犯した**あやまち**なのか？)

2．But I do think it is their husband's **faults** /If wives do fall: (4．3．86～87)

「でも、妻が堕落するのは夫の**せい**だと思います。」(夫の**あやまち**)

3．you shall close prisoner rest, /Till that the nature of your **fault** be known /To the Venetian state; (5．2．336～338)

「ともあれ、あなたを囚人として遇する、**罪状**をヴェニス政庁に報告するまで、それもお許しいただきたい。」

③*King Lear*

1．His **fault** is much, and the good King his master/Will check him for't: (2．2．137～138)

「この男の**咎**(とが)は確かに重うございます、が、それは主たる王御自身が親しゅう罰せられましょう。」(この男の**罪**は)

2．Now all the plagues that in the pendulous air/Hang fated o'er men's **faults** light on thy daughters！(3．4．66～67)

「さあ、大気の中に漂い、人間共が**罪**を犯すのを待っている厄病神に頼んで、その病毒の在りったけをお前の娘共の頭に浴びせ掛けてやるがいい！」(人間の**罪**に襲いかかる)

④*Macbeth* この劇には fault という語は用いられていない。

以上の「罪」を表す3語の外に用いられている crime, guilt, trespass の用例は少ないのだが、「罪意識」に関係が強いと思われる箇所の用例を幾つか挙げてみたい。

CRIME

①*Hamlet*

1．And for the day confin'd to fast in fires, /Till the foul **crimes** done in my days of nature/Are burnt and purg'd away.(1．5．11～13)

「昼は地獄の業火にとりまかれ、生前この世で犯した**罪**の数々の焼き浄められる苦患に堪えねばならぬ定め。」

2．A[8] took my father grossly, full of bread, /With all his **crimes** broad blown, as flush as May; (3．3．80～81)

「そうだ、あのとき、父上は現世の欲にまみれたまま、生きてあるものの**罪**の汚れを洗い浄めるいとまもあらず、あの男の手にかかって非業の最後をとげられた。」(あらゆる**罪**が／五月の花と咲き誇るさなかに)

②*Othello*

1．If you bethink yourself of any **crime,** /Unreconcil'd as yet to heaven and grace, /Solicit for it straight. (5．2．26～28)

「**罪**を犯して、まだ神の許しを乞うていないのなら、今すぐそれを求めるがよい。」

③*King Lear*

1．Tremble, thou wretch, /That hast within thee undivulged **crimes,** /Unwhipp'd of Justice; (3．2．51～53)

「震上るがいい、秘密の**罪**を犯しながら義の鞭を逃れある卑劣漢。」(卑怯にも、ひそかな**罪**を抱きながら)

2．You justicers, that these our nether **crimes** /So speedily can venge！（4．2．79～80)

「天は正義の守護者だ、下界の**罪**はこうしてたちまち罰を受ける！」

④*Macbeth*

1．but abound/In the division of each several **crime**, /Acting it many ways.（4．3．95～97)

「それどころか、この胸のうちには、ありとあらゆる**罪**の切れはしが一杯つまっている、それを縦横に働かせる。」(あらゆる**悪徳**)

次はGUILTとTRESPASSの例を合わせて引用する。

①*Hamlet*

1．Pray can I not, /Though inclination be as sharp as will, /My stronger **guilt** defeats my strong intent,（3．3．36～38)

「どうしていまさら祈れようか。祈りたい、心から祈りたいのだが、**罪**の深さを思えば、それもできぬ。」(それを上まわる**罪**の重さに押しつぶされる)

2．Mother, for love of grace, /Lay not that flattering unction to your soul, /That not your **trespass** but my madness speaks.（3．4．146～148)

「母上、お願いです。御自分を甘やかしてはなりませぬ。これほどかしましゅう申しあげねばならぬのも、所詮は母上の**罪**ゆえ、けっしてハムレットの狂気のせいなどとお思いになってはなりませぬぞ。」

②*Othello*　guiltはこの劇には用いられていない。

1．And yet his **trespass**, in our common reason, /(Save that, they say, the wars must make examples/Out of their best) is not almost a fault/To incur a private check:（3．3．65～68)

「それに、**罪**を犯したと言っても、普通に考えれば――それは、私も聞いております、戦争となれば、むしろ勇者を罰して全軍の見せしめとしなければならぬとか――でも、あれはほとんど過ちともいえぬささいな行き違い、さまでお責めにならなくともと存じます。(あのかたの犯した**あやまち**は)

③*King Lear*

1．close pent-up **guilts**/Rive your concealing continents, and cry/These dreadful summoners grace.（3．2．57～59)

「そのひた隠しに隠してきた**罪業**を、今こそ洗い浚いぶちまけて、この天の恐るべき呼出しに慈悲を乞うがよい。」

2．your purpos'd low correction/Is such as basest and contemned'st wretches/For pilf'rings and most common **trespasses**/Are punish'd with:（2．2．138～141)

「お考えのお仕置きは、最も下賤陋劣の徒が、こそ泥、その他の極く在りふれた**罪**を犯した場

合の恥ずべきものにございます。」

④*Macbeth*

1．what not put upon/His spongy officers, who shall bear the **guilt**/Of our great quell?(1．7．71～72)

「大逆の**罪**も、そのやくざ頭のお附きになすりつけてやったらよい、どうしてそれが出来ないと？」

trespass は *Macbeth* には用いられていない。

Ⅱ

以上で「罪」という意味を普通表しうる語のうち用いられた頻度数の多い6語 SIN, OFFENCE, FAULT, CRIME, GUILT, TRESPASS の用例をほとんど挙げたわけであるが、これらの用例の situation で登場人物の「罪意識(the sense of sin)」がどのように認められるかを次に述べてみたい。

先ず最も罪意識が顕著に認められるのはこの小論の始めに挙げたように、*Hamlet*の第3幕第3場での Claudius 王の独白だと思う。第3幕第3場の始めで、王の腹心の臣下 Rosencrantz と Guildenstern が Hamlet をイギリスに派遣する密命を受けて退場し、次に Polonius が Hamlet と王妃であり彼の母である Gertrude との対話を壁掛けのかげからひそかに盗聴する旨を王に告げて退場した後、王の独白が36～72行にわたって続けられ、Hamlet が登場して様子をうかがっているとも知らず、祈りの姿勢をとるが、Hamlet の73～96行にわたる独白と退場のあと、己れの祈りの空しさを嘆きつつ退場するのが第3場の流れである。この叔父と甥の長大な独白のどちらにも「罪」を表す語が用いられているが、殊に前者の独白は神への祈りを前にしての己れとの対話とも言うべきもので、この悪役には珍しく真摯な文言に満ちていて、この男にも良心の呵責があったのかと意外に思わせられる程、自らの忌まわしさへの深い嘆息が篭められたものである。「シェイクスピア熟年期の七悲劇」[9] において著者が述べるように、このような独白を含む *Hamlet* という作品自体が「ハロルド・フォードが『ハムレット』悲劇を「倫理的要素と精神的要素がきわだっている世界の魂のドラマ」と呼ぶように、この劇は宗教性、倫理性の強い作品である。」と評されるのも無理からぬことだと思う。著者はまた別の箇所で、「『ハムレット』悲劇は復讐劇のカテゴリーをこえて、人間の罪と罰の問題をわれわれに提示している。」とも述べている。それではこの Claudius の独白37行に用いられた「罪」の用法を既述の例文を参照しつつ振り返ってみよう。独白の冒頭に彼は "O, my **offence** is rank." と OFFENCE ①1．[10]の引用にある嘆きを口走る。rank という形容詞は、'offensively strong smell, rancid' として *Twelfth Night* 2．5．138の 'as *rank* as a fox' の例をあげ、比喩的用法として *Hamlet* のこの passage が挙げられている C. T. Onions の *A Shakespeare Glossary* にある通りの、鼻持ちならぬ悪臭がする「罪」がこの **offence** であり、その臭いは天にまで達する程のものだと王は嘆くのである。この **offence** は前述 OED の定義第7義のさまざまないいかえの幾つかを包摂しうるものであるが、やはり神への祈りの構えの中で用いられているからには sin の意味が強いと取りたい。次行の "It hath the primal eldest **curse** upon't—/A brother's **murder**." の中での **curse, murder** 共に訳者は「罪」「(兄殺しの)大罪」と訳しているが、primal eldest curse とはは創世紀4：11～12の「今、お前は呪われる者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる。土を耕しても、土はもはやお前

のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよい、さすらう者となる。」[11] とある神の呪いを指していることは明らかである。footnote によれば、この兄カインへの言及は第1幕及び第5幕にもあって作者がいかにこの Cain と Abel の物語を恐るべき罪の出来事として捉えていたかを思わせる。続いて40行の "My stronger **guilt** (cf. GUILT① 1 .) では祈りへの志向を挫く、より強力な「罪」に言及があり、この **guilt** にも上述の **offence** と同質のものであることを感じさせる。42～43行の cursed hand ～ with brother's blood は Cain の受けた curse の echo であろう。45～46行の表現 "Is there not rain enough in the sweet heavens/To wash it white as snow?" は旧約詩篇51：9の「ヒソプの枝で私の罪を払ってください／わたしが清くなるように。／わたしを洗ってください／雪よりも白くなるように。」と、ダビデ王がウリヤ将軍をその美人の妻バト・シェバと通ずるために激戦の地につかわして殺したときに歌った詩を反映しているといわれる。[12] またイザヤ書1：18にも「雪のように白く」の表現が見える。47行に再度用いられた **offence** は the visage of offence となって「罪びと」の意に用いられている。以下煩雑になるので一々詳述を避けるが、**offence** はさらに56、58行に用いられ、58行では **Offence**'s gilded hand と擬人化されている。また51、63行には **fault** が用いられ、63行では the teeth and forehead of our **faults** となって再び擬人法的表現が使われる［to the teeth and forehead はin face-to-face confrontation の意味だという footnote がついている］。また「罪」を表す通常の表現ではないが、**murder** が38、52、54各行に用いられて訳文では「殺人の**罪**」といった言葉で「罪」として捉えられている。ともあれ、この Claudius の独白37行中には実に offence 3回、murder 3回、fault 2回、curse 1回、guilt 1回が用いられ、「罪」の観念が強調されている。Milward が、この独白は「すべてのシェイクスピアの作品の中で最も明瞭に宗教的なものと言われている」と述べているのもむべなるかなである。[13] この独白をひそかに立ち聞きしていた Hamlet が、その24行に及ぶ独白では、81行目に **crimes** (cf. CRIME ① 2 .) で亡き父王の死が生前罪の最中に死の直前の手続き (cf. 1 . 5 . 76～79) もすませずに起こったものであることを述べている外には「罪」を表す語は用いられていない。

Hamlet で「罪」の語が次に多い幕は第1幕であるが、そのうち第1幕第2場101～102行の fault について言えば、これは Hamlet の叔父である Claudius 王が Hamlet に語りかけて、いつまでも悲しみに籠ることは天にも、故王にも、自然にも背く「罪」だといさめる時に使う言葉である。fault は第3幕第3場の Claudius 王の独白の場面では前述のように2回、51、63行目と比較的近いところで用いられて、context から言えば神を対象とした罪を指すように思われ、宗教的で sin と変わらない意味で用いられているようである。しかし同じ Claudius 王が Hamlet をいさめる時の fault はもっと軽度な咎として使われている。"fault to heaven" の表現を伴ってはいるが、それほど強い宗教色はない。

Hamlet についてはこの程度にとどめ、次に *Othello* の「罪」について見てみよう。

先ずここで用いられる SIN であるが、第2幕第3場では4回用いられており、そのうち初めの2回は Cassio のやや定型化された祈願の文 "God forgive us our **sins** ! (cf. Forgive us our trespasses–Lord's Prayer［主の祈り］より」) の中と、キプロス島の総督として Othello の前任者であった Montano が仮定的表現で、「自己防衛が罪でなければ」と述べる中で用いられているが、後の2回はほとんど連続していて、Iago が独白の中で Othello を嘲弄していう文句の中に入っている。(cf. SIN ② 2 .) それは宗教的な意味の sin であるが、ここでは「罪意識」は全く見られないと言ってもよく、Iago の悪魔的な人間性を示す表現でもある。*Othello* には四大悲劇のうちで最も多く sin が用いられ、全部で8回であるが、第5幕の2回は "thy **sins**" と

"thy **sin**" となっていて、Othello が Desdemonaを殺すに先立って Cassio との不倫の罪の告白を迫る時に用いられ、宗教的色彩が濃いが、自己の「罪意識」ではなく、他者にそれを要求するために用いられている。(cf, SIN ②3.) 他に *Othello* で使われた語としては crime(1回)、offence(7回)、vice(7回)などがあるが、その中 offence が頻出するのは sin の場合と同じく第2幕第3場で、4回あるが、いずれも宗教上の「罪」というほどのものではなく、比較的軽い咎である。他の offence の例もそれほど重い意味のものではない。vice も同様で宗教上の「罪」や「罪意識」に言及するものではない。その他に wrong が集中的に使われた第4幕第3場の Desdemona と Emilia との夜の対話があるが、ここでは立て続けに4回 wrong が用いられ、他の表現 ill と共に仮定の上での不倫の「罪」を指しているが、Desdemona よりも世間の風に染まった Emilia はこうした罪を軽くみなしている。ここで注目すべきことは *Othello* においては「罪」という訳語が目立って多く、第4幕だけでも福田訳では9回だが、小田島訳となると15回に及ぶ。このちがいはどこから生ずるかというと、たとえば第4幕第3場では福田訳の6回に対し小田島訳では8回と多いが、結局「罪」と訳さず、「悪いこと」、「したこと」と訳したり省略したりすることで回数が減ずる。しかし第4幕第2場での Othello と Desdemona との対話中74、78、82行でくり返される "What, committed?" "What committed！" ". . . what committed, ——" の原文の訳は福田訳、小田島訳共に「罪」の訳語を3回くり返して、Othello の仮想による Desdemona の不倫を断罪する怒りを明らかにしている。[14] なおこの似通った3つのの原文は注意して見ると句読点や大文字、小文字の使い方に微妙なちがいをもたせてある。(ただし版によって variation があるが。)

続いて *King Lear* における「罪」の用法を見てみたい。この劇に登場する sin はただ1回にすぎないが動詞として用いられた語はよく知られた第3幕第2場59行(cf. SIN ③1.)の表現で sinn'd、sinning と分詞形で用いられている。名詞の sin の唯一のもの(cf. SIN ③2.)は、Lear 王の、盲目の身と化した Gloucester 伯との対話でこの世の偽善を糾弾して、富貴でおおわれた罪は正義の槍でもあばくことが出来ないと慨嘆する台詞の中で用いられ、「罪意識」からは遠いものである。前述の有名な "More sinn'd against than sinning." に関連して、Lear が第3幕第2場49～59行で忠臣 Kent 伯に吐露する台詞では、crimes や guilts が用いられて世の隠蔽された罪の数々をあばき、最後に自分は「罪を犯すより犯された人間」であると己れを規定して結ぶ。ちなみに、*King Lear* では唯一神としての God 表現は避けられ、Gods か gods が用いられているところに注目したい。[15] *King Lear* で多い「罪」の表現の語は offence で、8回を数えるが、いずれも自分の罪を意識するものではなく、他者の罪を述べる用例である。crime を用いた例も他者の罪を糾弾するものである。

最後に *Macbeth* においての「罪」表現を見ることにする。この劇では己れの罪に悩む姿を描く台詞はあちこちに散見する。先ず sin を用いた2例のうち始めのもの(cf. SIN ④1.)では、王 Duncan が Macbeth に対しての感謝が、あまり手柄が多いため間に合わぬことが気になると己れの非を認める発言をするが、これは社交辞令のたぐいで、重く考えるに値しない。注目すべきは、形は形容詞形だが、sinful を用いた例である。その箇所を少し長く引用すれば、

Sinful Macduff！ /They were all struck for thee. Naught that I am, /Not for their own demerits, but for mine, /Fell slaughter on their souls: Heaven rest them now！ (4. 3. 224～227)

「**業の深い**マクダフ、貴様のために、みんな殺されたのだぞ！なんというやくざだ、おれは、あれたちの罪ではない、おれが悪かったために、皆が酷(むご)い目にあったのだ、頼む、安らかに眠ってくれよ！」(**罪深い**マクダフ／けしからん／おれの罪のためだ，罪もないあいつら

みんなが／虐殺にあったのは）
ここでは Macbeth によって妻子、召使に至るまで虐殺された Macduff が、そこにいあわせずに、城を不意打ちされ、悲惨な結果を招いたことを貴族仲間の Rosse から打ち明けられ、男泣きしながら自分の非を悔いる場面で述べられる台詞である。「罪」と訳された demerits という語もここで用いられる。Macduff の罪意識は殺人を自らの手で犯したわけではないが、己れの行為を悔いる厳しいものになっている。ほかに treasons を用いた例として次の用例がある。
who did report, /That very frankly he confess'd his **treasons**, /Implor'd your Highness' pardon, and set forth/A deep repentance.（1．4．4～7）
「(コーダの死を見とどけた者から、)直接ききましたところ、己が**罪**を率直に認め、王のお許しを乞い、深く悔いていたとか、」
「罪」の語は用いられていないが注目すべきものに、
God, God forgive us all！（5．1．72）
「神よ、人間の罪をお許しくださるように！」（神よ、われらの罪を許したまえ）
があるが、これは Macbeth 夫人の夢遊病の中での錯乱を目の当たりにして、侍医が述懐する台詞の中に入っているもので、ちなみにその直前の台詞は "More needs she the divine than the physician, ——"「お妃は医者より僧侶が必要だ。」である。

Ⅲ

以上のように四大悲劇の中での「罪」表現と「罪意識」についての引用例とその時の状況を述べて来たのだが、冒頭に記したように、4つの悲劇のそれぞれには血なまぐさい殺人が取り上げられており、種類こそちがえ、その罪深さにおいて変わることはないのだが、その殺人の罪を犯した当の本人達の口から深く罪を悔いることばが吐かれる例はと言えば、何と言っても *Hamlet* の Claudius 王の独白にとどめをさす。そこで彼は Cain と Abel の出来事を創世記から想起しつつ、兄弟殺しの罪を心の奥底から悔いている。しかし彼は罪の恐ろしさに震え動転するのみで、ついに真剣に神に赦しを求める祈りを捧げえず、"Words without thoughts never to heaven go."（3．3．98）「心をともなわぬ言葉が、どうして天にとどこうぞ。」と自嘲を残して立ち去ってしまうのである。*Othello* においては、将軍 Othello は Iago の奸言にたぶらかされて、愛する妻 Desdemona を絞殺するまでに至るが、Desdemona の "A guiltless death I die."（5．2．123）「無実の罪で死ぬのです。」という悲痛な叫びを聞きながらも、己れのあやまちに気づきえず、Iago の妻 Emilia からその夫が悪の張本人だと知らされ、妻が全くの冤罪で死んだと悟った後も、Iago を悪魔呼ばわりしたり、己れを地獄に落せと絶叫はするが、自らの恐るべき「罪」の認識に欠ける憾みがある。彼は最後まで己れの「罪」に言及することなく、更に己れを刺し殺すという新たな罪を加えつつ死に赴く。その死は悲痛の極みであり、彼のいまわのきわの言葉、"Of one that lov'd not wisely, but too well:（5．2．345）「愛することを知らずして愛しすぎた男」（愚かにではあるがあまりにも深く愛した男）とか "killing myself, to die upon a kiss."「死にながら口づけすることだ。」という表現に悲哀を感ずるものだが、Othello 自身の、殺人の罪に対する意識は今一つ抉りが足りなくはないかと思われる。

次に *King Lear* については、この長大な悲劇の父子相食む争いに、Lear 老王が自らの愚かさを嗤って狂気にまで至る暴風雨中の情景や、両目を抉られた Gloucester の嘆き、Cordelia の真の愛に後になって気付かせられて、死せる彼女の体を擁して天を仰ぐ Lear の台詞は悲壮を超えて鬼気迫るものがある。しかし *King Lear* の人物群の中で、己れの罪を深く悔い、それを台

詞で言い表した人物はいないのである。

Macbeth においては主人公 Macbeth が魔女たちの予言に思わぬ野望をふくらませた結果の大罪は主殺し、臣下や家族殺しと連鎖して、自己破壊につながる泥沼に沈みこんでゆく。夫と共謀の王殺しを遂行するためには女としての性を失うことすら願う Lady Macbeth も、心に巣くう罪業の重みに押しつぶされて狂気に至るのであるが、二人ながら罪を悔いる心境にはならず、ただ罪の圧倒的な浸透力を Macbeth は "Sleep no more ! Macbeth does murther Sleep, ——the innocent Sleep;" (2. 2. 34～35)「『もう眠りはないぞ！マクベスが眠りを殺してしまった』と——あの穢れのない眠り、」あるいは "Will all great Neptune's ocean wash this blood/Clean from my hand? No, this my hand will rather/The multitudinous seas incarnadine, /Making the green one red." (2. 2. 59～61)「大海の水を傾けても、この血をきれいに洗い流せはしまい？ええ、だめだ、のたうつ波も、この手をひたせば、紅一色、緑の大海原もたちまち朱(あけ)と染まろう。」とかいう台詞で表白してみせる。Lady Macbeth の方は第5幕に入ると、もはやうつつなき夢遊の日々を送るようになって、"Here's the smell of blood still: all the perfume of Arabia will not sweeten this little hand. Oh ! oh ! oh ! " (5. 1. 47～49)「まだ血の臭いがする、アラビアの香料をみんな振りかけても、この小さな手に甘い香りを添えることは出来はしない。ああ！ああ！ああ！」と罪の証しとなる言葉を思わず口に出してしまうようになる。Macbeth も夫人も共に最後は無残な死を遂げることになる。悲劇 *Macbeth* には得もいわれぬ無常感が漂っているが、この魂にくいこむ無常感の問題が Shakespeare の作品をつらぬいて流れる基本的主題[16]だということになる。

この四大悲劇を通して、明瞭に自己の罪意識を表白しているのは、繰り返して言うが *Hamlet* の Claudius 王であろうが、それも彼にあっては一時的に訪れた思いであり、また彼は罪に沈湎する日々を送り、遂に Hamlet による復讐を成就させる結果を招いている。他の三作品にあっては、主人公たちによる直接的な「罪意識」の表白はないが、隠された罪意識ということになると、彼らの独白を通して、潜在する意識が己れの疚しさを、清盛の法衣の下の鎧のように透かして見せていると言えよう。

このようにして四大悲劇の人物の罪意識は究めがたいものではあるが、作者 Shakespeare は罪を犯した人物たちの辿る運命の中に、死に至る苦悩という罰を用意して、観客乃至読者に罪業の持つ堪えがたい重さを悟らせようとしているのかもしれない。

注

1) 四大悲劇の原文はすべて "The New Arden Shakespeare" (London: Routledge, 1989～1991) による。また訳本は福田恒存訳(新潮文庫版)と小田島雄志訳(白水 u ブックス版)とを併用した。
2) John Bartlett, "A Complete Concordance of Shakespeare", (Macmillan, 1984)
3) Oxford English Dictionary (Compact Edition, 1971)
4) 引用原文の箇所の示し方は算用数字で最初が幕、次が場、次が行を表す。例。1. 5. 74～79＝第1幕、第5場、74行～79行。
5) 引用原文の日本語訳は「　」内が福田恒存訳、(　)内が福田訳の下線部のみの小田島雄志訳。ただし小田島訳は福田訳と同じか、ほとんど変わらない場合は省略し、かなり異なっている場合は全文を記すこともある。
6) M. C. ブラッドブルック『歴史のなかのシェイクスピア』(岩崎宗治・稲生幹雄訳、研究社出版、1992) p. 286に「彼(シェイクスピア)の劇にくり返し出てくる言葉に『われらの罪を許したまえ、われらに対する罪をわれらが許すごとく』という表現がある。」とある。

7）福田訳で「兄殺し」となっている箇所は、旧約聖書の創世記4：8～16にあるCainとAbelの物語への言及であり、聖書では兄Cainが弟Abelを殺したことになっているから、小田島訳のように、「兄弟殺し」とする方が無難であろう。

8）A=He　cf. C. T. Onions: "A Shakespeare Glossary" (Oxford・紀伊国書店、1953) p. 1.

9）高月麗子『シェイクスピア熟年期の七悲劇』(九州大学出版会、1990) pp. 73、71。

10）引用文の分類はSIN, OFFENCE, FAULT, CRIME, GUILT, TRESPASSの順に並べ、各項目を①*Hamlet*②*Othello*③*King Lear*④*Macbeth*に分け、更に①～④の中で幕の若い順に1．2．．．の番号をつけてある。

11）聖書からの引用はすべて新共同訳による。

12）Thomas Carter, "Shakespeare and Holy Scripture", (New York: AMS Press, 1970)、p. 371。

13）P. ミルワード、『シェイクスピアと宗教』(山本浩訳、荒竹出版、1977)、p. 67。

14）福田訳「どんな罪を犯したかと！――どんな罪を犯したかと！――どんな罪を犯したか！」(新潮文庫、p. 136)。小田島訳「どんな罪を／犯しただと？――どんな罪を犯しただと！――どんな罪を犯しただと！」(白水uブックス pp. 177、178)。

15）青山誠子『シェイクスピアにおける悲劇と変容』(開文社出版、1985)、p. 71に次のような記述がある。「シェイクスピアがこの劇(リア王)の舞台として、異教の世界を選んだのは何故であろうか。『神』(God)の名を舞台で用いることを禁じる法令が1606年5月に発せられて以後、劇作家や俳優たちは、異教の神々(gods)を代用することによって急場をしのいだが、『リア王』の執筆は、この法令以前、1504-5年の冬(または1505-6年の冬)と推定される。しかも『マクベス』は別として、『リア王』以降の劇は、すべて異教の世界に展開し、基本的にはキリスト教的視点に基づきつつも、さらに広い神話性、宗教性を帯びていることに気づくならば、『リア王』執筆当時のシェイクスピアの心に、異教の世界を選択する必然的志向が存在したと推定せざるを得ない。」

16）日本シェイクスピア協会編『シェイクスピア案内――シェイクスピアの詩(平井正穂)』(研究社出版、1933)、p. 110。